

法話概略【初代苑長のお話『心の目が開いている』より】

今月5月7日は、初代苑長・受宣氏の祥月命日で、今年は丸25年です。

過去の講演録の中から今回は、『心の目が開いている』（平成元年2月）というお話をご紹介します。

（前半省略）

盲学校の予たちが碧祥寺博物館に来た時、私は最初、説明し始めてびっくりした。

「この壁画は、岩の粉で描いています。赤い色はアメリカの岩石、緑色はイギリス、紫はフランスの石です。」と話していた所で、ハッと気がついたのは、目の見えない予たちだという事です。これに気づいた時、私は何も話す事ができなくなりました。それでも、その後も案内しながら回って、観音様の所で今日の説明を終わらせてもらおうと思って皆さんが来るのを待っていたら、少し弱視の子が階段を上がってきて、私の前から降りていく。皆、私の傍にいるのが嫌で行ってしまったのかな…と思っていたら、何の事はない。

「△△ちゃん。」

と、一番見えない予の名前を呼ぶ。

「そこからだったらね、もう少し左の方に曲がりながらおいで。そしたら、十数歩歩いていくと、膝くらいの段がある。そこを登ったら、何歩か歩いて止まりなさい。」

と、次から次と予たちに声を掛けてこちらに送ってくる。この姿を見ながら、可哀そうな予たちと思っていた私が、申し訳ないという気持ちに変わりました。

五体満足の人たちを案内していると、とにかく、自分だけよく観たいという事で、他人の邪魔をしている事など1つも気にしていない人たちに会います。逆にこの予たちは、もっとも弱い立場の人から導いていくという事が、身につけているのです。

そこで私は、こう切り出しました。

「皆さん、皆さんは目が見えないでしょう。」

すると、皆びっくりしてザワザワと騒ぎました。面と向かってこんな事を言うもんですから…。

「私は目が見えます。だから先ほどまで、皆さんを可哀想だと思っていました。しかし、可哀想なのは僕だと気がきました。他人を押し分けてでも自分の幸せだけを目指して歩いていく人が多くなった世の中で、皆が先程、自分より目の見えない人に席を譲っていく姿を見て、申し訳なかった、すまなかったと気づかれました。

私は目が見える。皆さんは目が見えない。だが、私は心の目が開いていない。皆さんは心の目が開いている。」

そう言って、私が畳に頭をつけてお詫びしようとした、その瞬間、彼らは叫び始めたんです。

「そうだ、そうだ、オレらは、心の目が開いているんだ。」

…今、高齢化社会は福祉の問題として考えられていますが、福祉という事は決して、弱い人を強い人が救うという事ではない。私の感じている福祉はそうではありません。まるっきり反対です。

弱い立場に立ったからこそ芽生えた素敵な心、それを殺伐とした世の中の人たちに戻していくのが福祉だと思います。

その他連絡事項

- ① 各部署・各ユニットの上半期目標の紙を配布しますので、各場所で貼り出しして下さい。また、すべての目標をまとめた物を後ほどお渡ししますので、他部署や他ユニットの物もよくご覧頂きたいです。
- ② 新人育成プロジェクトの5月の計画ができました。それぞれ要確認をお願い致します。
- ③ 癌を乗り越えていく事を宣言したリレーフォーライフきたかみの取組みが来月あります。別れた大切な人や、今、まさに癌と戦っている人に捧げるルミナリ工作等、盛り沢山の中身です。検索して、興味ある方は、ルミナリエづくりやセルフワーク等にご協力頂ければありがたいです。

【光寿会理事長】